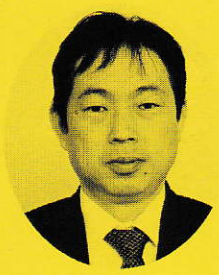
甲南だより

No.199
平成29年７月24日
鹿児島県立甲南高等学校
鹿児島市上之園町23番地1
ＴＥＬ（099）254-0175
題字　秋元望花（本校教諭）

甲南生へのエール

教頭　吉元彰一



創立百十周年を終え、新たに百十一周年のスタートを切った甲南高校。県内唯一のＳＧＨ指定校も三年目となり、学校目標の『地球規模でものを考え行動できるリーダーの育成』の方針の下、学校全体が活気づいていることは私自身承知していたつもりでしたが、約三十年ぶりに母校に戻ってきた『甲南』の姿は、在学時のイメージからは想像以上の激変ぶりでした。それは驚愕である以上に、期待感あふれる変容ぶりで、今後の躍進を実感できるものでした。

そんな中、今学期を終えて一番印象的だったのは、四月に実施された鶴甲戦でした。全校生徒が一丸となって甲南高校の勝利を目指し、生徒主体で応援練習を行いました。限られた時間内で先輩が一年生を鼓舞しながら応援方法を伝授し、フィナーレに行う甲南ジャンプまでの一連の応援形態を、入学後僅か２週間の一年生が完全に体得したところに、甲南高校の伝統と甲南生のポテンシャルの高さを実感しました。結果的に総合優勝を果たしましたが、特にスタンドでの野球応援は一体感のあるもので、待望の野球の勝利を後押しする形となりました。

さて、私自身の高校時代はというと、学習への意欲はさておき、心理的には、『社会に出るまでに、今為すべきことは何か』をいつも考えて行動していたと記憶しています。ですから、他人と同じであることを嫌い、自己の確立を念頭においていました。そのため安易に流行に流されたくないという強い思いがあり、周囲がバンドやアイドル等の音楽に熱中したり、身だしなみ以上のファッションに敏感になったりと、ブームに影響されていましたが、無理にでもそこに一線を引こうとしていた自分がありました。今思えば大人の階段を早く駆け上がりたいという社会への憧れがあったんだと思いますし、ある意味勉強という現実からの逃避もあったように思います。

生徒の皆さんも、多感な時期だからこそいろいろなことを考え、時に悩むことでしょう。でも形はどうであれ、それは決して無駄ではなくむしろ必要なことだと思います。何故ならそこに自分と対峙する場面が必ずあるからです。皆さんが高校卒業後に各々歩む進路先では、己の性格や可能性を踏まえて歩むことが求められるでしょう。それは高校在学時以上に、多岐にわたる物事を自力で対処する順応性や柔軟性が求められるはずです。そして、そんな厳しい現実を打破するのは、誰でもなく自分自身であり、そのためには自己理解・自己把握が不可欠になってくるからです。

高校の学習内容はとてつもなく多く、進度も早いことから一息つく間に取り残されてしまうでしょう。とにかく焦らず、着実に歩を進めることが大切で、それ以外には最短の道程はありません。先日の甲南塾で講師の外先生も言われたとおり、真理を究めることが唯一の近道なのです。そして、その努力の過程が、社会で生き抜くための人間力となるはずです。一学期も終わり、いよいよ勝負の二学期。ここまで順調な人も、思うように進まず出遅れた人も、今の自分の立ち位置を再度確認し、一念発起し挑む姿勢で二学期を迎えてください。

創立記念講演

（平成二十九年第二回甲南塾）

五月二十日、創立記念式典が行われた後、創立記念講演会（平成二十九年第二回甲南塾）が開催されました。講師に、甲南二十二期で九州大学大学院医学研究院麻酔・蘇生学教授の外須美夫先生をお招きし、「真理の扉を開くということ」という演題で御講演いただきました。

外先生は、１９７１年本校卒業後、九州大学医学部へ進学。大学卒業後、九州大学医学部附属病院麻酔科にて研修医として医療に携わり始めました。１９８５年に米国ウィスコンシン医科大学麻酔科へ留学。帰国後、九州大学医学部附属病院へ戻り手術部の助手を務め、その後、麻酔科蘇生科の講師を経て手術部の助教授となります。１９９７年から北里大学医学部麻酔学講座の教授、２００８年からは九州大学大学院医学研究院麻酔・蘇生学の教授として活躍。２０１４年から九州大学病院副病院長となり、現在は日本麻酔科学会理事長をはじめとし、多くの学会の理事を務め、厚生労働省医薬品・医療機器安全対策部会の部会長としても手腕を振っておられます。また、「痛みの声を聴け」や「日本百走道」上巻、下巻など多数の著書も手がけており、あらゆる方面でご活躍されています。

御講演では、まず高校時代の陸上部での経験「敗者の頑張り」について話して頂きました。そして、先生がこれまでに経験されたことをもとに、ユーモアを交えて熱心に語っていただきました。

「真理を追い求め、継続して努力を続けること」や「努力する限り人は迷う、迷っていない人は努力していないこと」、「生きていく上で命・愛・自然を大切にすること」をはじめとした多くの言葉に、生徒たちは心を揺さぶられていました。

御講演をとおして、生徒達は学ぶことへのモチベーションを高めるとともに、今後の生き方・在り方に大きな示唆を頂く貴重な機会となりました。